

人生ハンド仏句

第61号

H.19.4.1
(毎月1日発行)

老いをどう生きる

住職 谷川寛俊

現代は平均寿命が大幅に延び、そしてさらに延びつつあります。

その要因の大きなものは、医療技術の向上に有りますが、しかし逆にいうと終末医療の長期に及びます。つまり病院に入院している限り、死にたくても死ねない、また死なしてあげたくても死なしてあげられない、ということが現実に出てきています。もし高齢のおじいさんやおばあさんが入院するとそれを看護するのは一般に同居していた長男夫婦であり、特に長男のお嫁さんがその任に当たることが多いようです。医者はこの夫婦に病状を語り、末期症状の場合は余命を知らせませぬ。家族はここでそれを患者に知らせるべきか、そして知らせるとすればどういつ時に言えいいのか、悩みます。

ガン告知は、欧米では六割以上と言われていますが、日本ではかなり少なく調査によると二割以下だそうです。これに対しガン告知を望む人は、日本では約六割、つまり告知を望む人が多い割合

には、実際には告知率が少ないのであります。この理由は死に対する恐怖の乗り越え方、軽減の仕方を日本人の多くが持つていないからではないだろうか。死と向かい合えるのは宗教心であり、若いうちから仏への信心(信仰心)が必要なのです。

現代の日本は、世界一の長寿国となっています。平均寿命は年々高くなり、今や百歳を超える人は珍しくなくなってきました。そして百歳以上の約八割が女性といえます。やがて人は必ず死を迎えます。死のことについて考えたり語ったりするのは余りいい気分ではありませんが、それが現実である以上、もっと身近に考えなければならぬのではないのでしょうか。

長寿社会では、老いの期間が長く、それだけ死に直面する時間も長いわけでありませぬ。昔は、六十歳を越えたと年寄りと思われましたが、現代は六十代半ば位からでしょうか、老いたか老いてないかは、一つは本人の気持ちが大きくと言われます。自分が若いと思えば若いし、年老いたと思えば年寄りであります。老人ホームでは、八十五パーセントが女性だといえます。平均寿命が女性の方が高い現状では当然の事かもしれませぬ。

そして現代では、妻には一つの転機があるといえます。それは夫が定年で会社を辞

編集・発行
玉蓮山 真成寺
編集部
TEL・FAX (0765)22-2268
メールアドレス
kokorochanthk@ybb.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/sinjoyujoyama108/>

めた時、そして夫が亡くなった時です。夫が定年になった時は、長年の生活習慣が変わるだけで、女性にとってそう大きな環境の変化ではないと思います。しかし夫が亡くなると生活環境の他、どう生きていくかということも考えざるを得ませぬ。これからの妻たちにとって、夫を見送った後、どう生きるかを考えて準備しておくべきかもしれません。やがて老化現象が顕著になっていくと、鏡に映る自分の姿にため息が出る人もいるかもしれませんが、その時はこのように思えばいいのです。『こいついつうになるまで、よく生きてくれた』と、むしろ長寿を仏様に感謝するべきであります。要は、日々の信心に徹し、唯一絶対、しかも成仏疑いないこの法華経とお題目の信仰に精進し、泰然自若の気持ちを持ち続けることこそ老いの身の生き方なのではないでしょうか。



余生のかがやきは
落日の閑(しず)かなかがやき
自分と向き合う閑かな時間